

第3回加茂市エリアプラットフォーム準備協議会 議事要旨

1 日時：2024年1月16日（水）午後2時から4時

2 場所：加茂市役所3階 301・302会議室

3 出席者（敬称略）

委員：堀内 大祐（加茂商工会議所 会頭 代理出席）
田邊 良夫（加茂市商店街協同組合 理事長）
萩野 正和（株式会社 connel 代表取締役）
松井 大輔（新潟工学部工学科 准教授）
加藤 はと子（全国「道の駅」女性駅長会 会長）
中丸 精一（第四北越銀行 加茂支店 支店長）
杵鞭 久（加茂信用金庫 理事長）
小林 一隆（NST新潟総合テレビ 情報制作本部 デジタルマーケティング部 部長）
市川 恭嗣（加茂市 CSO）、渋谷美浩委員（新潟県三条地域振興局 局長）
川崎 大一郎（加茂青年会議所 理事長）
横山 泰（新潟経営大学 地域活性化研究所 所長）
若月 守（NTT東日本 新潟支店 副支店長）

事務局：政策推進室、(株)オリエンタルコンサルタンツ

4 議事

(1) 開会

(2) 資料等の説明

1) ワーキンググループでの活動報告と未来ビジョンの策定に向けて

事務局から「エリアのビジョンと実現に向けたポイント ワーキンググループでの協議・検討内容の報告」及び「資料 5」、萩野委員から「資料 4」の説明があった。

2) 質疑応答及び意見交換

【萩野委員】エリアビジョンの実現に向けて、実際にどのようなことをやっていけばよいか、様々なことを考える必要があると思う。ハード、ソフトそれぞれにやらなければならないものがある。一方、予算も限られていることから、すぐに実施でき

るものと、そうでないものがある。今後は、ポイントとなる事業について、見極めていくことが重要である。

【事務局】おっしゃる通りである。これまで5回の議論を経てきているが、1回目、2回目のワーキングのなかでは、具体的な活動の取組に関するアイデアをいただいた。今回のエリアビジョンを通して、それらのアイデアを見つめ直してみると、エリアビジョンに適合する活動が見えてくるのではないかと考えている。令和6年度は、具体的な取組について、さらに検討していく作業が必要だと考えている。

【市川委員】この後の皆様の議論の焦点を絞りたいということもあり、いくつか確認したい。今日の資料である「エリアビジョンの再整理」に何を盛り込むのかということが、議論のコアであるとの認識でよいか。

【事務局】おっしゃると通りである。本日の資料3の7ページ、「エリアの目指すビジョンの再整理」に記載されている「未来ビジョンおよびエリアビジョン」についてが、本日皆様に最もご議論いただき、決定していきたい内容となっている。また、これに紐づく形で、8ページでは「実現に向けたポイント」を整理している。これについてもワーキンググループを通した議論が拾われているか、また、エリアビジョンとの整合性がとれているかという点も議論していただきたい。未来ビジョンは、市内在住の市民の皆様、事業者の皆様、市外の実業家である民間のプレイヤーの皆様と共に感じながら、加茂の活動に参加していただける、あるいは、加茂で何かの活動を興していく際のキャッチコピーになっていくと考えている。その辺りも含めて、特化して打ち出していくべきものがあれば、ご意見をいただきたい。

【市川委員】抽象度の高い7ページ、8ページの内容について、ある程度今の段階の議論で、大枠を決めていきたいということか。

【事務局】その通りである。

【市川委員】7ページ、8ページを理解するための補足情報として、9ページ以降の資料が掲載されているとの理解でよいか。

【事務局】その通りである。

【市川委員】ワーキンググループにご出席いただいた方は、内容を承知している方が多いと思う。一方、初見の人が7ページを見て分からないと、今後公表するビジョンとして適切でないと思う。本日ご出席の委員のなかで、ワーキンググループにご

出席いただいていない委員は、「ここが分からない」という目線で、ご意見をいただきたい。

【松井委員】7ページ、8ページについて、ビジョンとして確定する前の案を市民や企業にどのように見せていくのか、どのようなスキームで確定させていくのか。1回目の協議会では、セミナーを開催するという話もあったと記憶している。

【事務局】本日の議論を踏まえて「未来ビジョンの骨子」を作成したい。その骨子は次の第4回エリアプラットフォーム準備協議会を経て、市民に公開し、市民からも意見をいただきたいと考えている。

【横山委員】萩野委員への質問だが、先ほどの説明で、ビジョンを目指す前にミッションがあり、これを串刺す形でビジョンを作ると説明されていた。今回、ビジョンの骨子をまとめていく場合、ミッションをハッキリさせていくのか、それとも、ザックリとまとめていくのか。その点についてお伺いしたい。

【萩野委員】ビジョンが先か、ミッションが先かによって異なるが、加茂の場合はビジョンから入っている。ただし、まだ「的」がぼんやり、ほんわかしている。「的」をすっきりさせて、具体的な未来像を描いていく進め方や、具体的なシーンを議論しながら、未来ビジョンとのズレを帳尻合わせする進め方がある。新潟市の場合、行ったり来たりを繰り返した。ビジョンをクリアにしていくというよりかは、現在問題になっている、困っていることを解決する視点から入っていった。一方、新潟市としては、「こういう街に変えたい」という想いもあったため、その辺は将来像のパスに描かれている。また、未来ビジョンの標語の部分は、ほわっとしたものになっている。

【横山委員】本日の資料は抽象度が高いため、ミッションというか、具体的な条件があった方が良かったと思うが、このままでも議論が進められないわけではないということか。

【萩野委員】そのとおり。ただし、今の段階はこれでもよいが、次の段階では、ミッションをクリアにしていくのか、ビジョンをクリアにしていくのかを議論する必要がある。

【事務局】新潟駅・万代地区周辺将来ビジョンは、つながる「2核、水辺、3モール」という標語を掲げている。

【萩野委員】「2核、水辺、3モール」だけだと具体的でないためよく分からないと思うが、内容をみていくと10のストリート毎の将来の姿が描かれている。一つのまとめ方としてこういう方法もある。

【田辺委員】資料にある「ワンデーストーリー」のフレーズは、一つの街が1日で歩ききれるというコンセプトになっており非常に良い。こじんまりして集約されていてよい。加茂市は、だんだん来街者が少なくなっている。これをいかに増やしていくのかということが重要である。また、祭り・イベントが段々静かになっているように感じる。継続的に加茂市に来てくれる人を増やすことが大切である。こうしたことを具体的に考えていくことが重要である。

【市川委員】田辺委員のおっしゃる通りである。そもそも人口が減っている。新潟の未来ビジョンの標語を見聞きすると、「何かをやる」ということは分かる。加茂も「何かやるよね」というメッセージを打ち出す必要がある。未来ビジョンのタイトルや、資料に書かれている事項は、対外的な宣伝になると考えている。そうであれば、もう少し具体的なもの、イメージしやすいものがあると良い。この点について意見を聞きたい。ワーキンググループの議論では、商店街を「道の駅化」すれば良いのではないかとの意見があった。ただし、議論の過程の中で、道の駅を前面に出しすぎると、ミスリードしてしまうのではないかとの話になり、今日のようなまとめ方になっている。一方、外部の人から見れば、「商店街全体が道の駅だよ」というメッセージは、分かりやすく、イメージしやすい。外部の人や市民にどこまで分かりやすく伝えるかがポイントである。

【田辺委員】人口が減れば商店が減る。さらに後継者もない。こういう状況下では、余程意欲のある人でないと商いをしようと思わない。

【市川委員】どこの商店街も共通の悩みを持っているが、加茂はまだ商店街が残っている。「加茂の「いいね！」がまるごと詰まったまちの”ぶらっと HOME”」が対外的に発信するキャッチコピーと相当するものと考えているが、これだとパンチが弱いかもしれない。

【田辺委員】新発田でも長岡でも飲食店だらけだが、加茂は飲食店すらも少ない。そこをどのようにするのか。1人、1人が社長となったつもりで考える必要がある。

【市川委員】商いしたいと思う人に来てもらうために、どういう打ち出し方が良いかについて考える必要がある。

【田辺委員】加茂には何でもある。加茂錦の酒蔵も見学できるようにしてはどうか。

【萩野委員】商店街の暮らしを再構築することは、令和の商店街を残す方向性でもある。人がいないと商売が衰退するため、人がいる状況をつくる必要がある。お店だけではなく、人も増やしていかなければならない。商店街に人がいるような状況をつくる施策も含めて取り組む必要がある。例えば、広場をつくるなどである。何をやったら良いのかを考えていかないと、具体の部分が見えてこない。長岡の商店街は、若い人が少しずつ増えている。米百俵プレイス、アオーレができて、夜も若い人が滞留している。新発田もそうである。ヨリネス、イクネスの整備のほか、無料wi-fiスポットのおかげで高校生がたくさんフリースペース集まっている。その結果、美容院が増えたり、商店街の空き店舗がじわじわ改修されたりしている。人がいる状況をつくるという視点が必要である。前回の質問にもあったが、誰がいつやるのか、長期なのか短期なのかといった仕組みについて、来年度は深めていく必要がある。

【小林委員】未来ビジョンは「加茂はこういう街である」ということを定めて宣伝をするためのものである。そこに向かって、自治体も整備を進めていくが、まずはプレイヤーの皆さんの意向を未来ビジョンに反映する必要がある。そうすると、おのずとプレイヤーは決まってくる。商店街の方や移り住んでくる居住者、更には学生もプレイヤーである。一方、加茂市の場合は、新潟市とは事情が違う。新潟市は様々な人がいるため、プレイヤーも広く存在する。未来ビジョンでは、ターゲットとなるプレイヤーに向けた宣伝文句を用意すれば良いと思うが、今のままでは、誰に向けたものなのかが分かりづらい。移住して来る人向け、来街者向け、住んでいる人向けなど、ターゲットを分けた方が良いのではないか。総論で話すと「良いとこ取り」となるため、わかりにくくならないか。

【中丸委員】未来ビジョンのイメージが、いまひとつ消化できていない。未来ビジョンとは、計画のことを言うのだろうか、キャッチコピーのことを言うのだろうか。どのような位置づけで今後アナウンスされていくのかが見えない。未来ビジョンで「心地よさを醸す街」といった場合、「何が変わるのだろうか」と思ってしまう。外の人に対しても、中の人に対しても、何かしらのメッセージ性が必要ではないか。

【萩野委員】単純に「心地よさ」が未来ビジョンであるとした場合、その「心地よさ」を醸し出すために、例えば「4大プロジェクトが動きます」というのであれば、何となくプロジェクトのイメージが発表されるため、理解することができる。例えばそのようなことが必要ではないか。そういうことを最後に言うことを到達点にして来年度は議論する必要がある。

【市川委員】最終的に未来ビジョンを発表するときは、主要プロジェクトも打ち出すことになる。しかし、骨子だけが出された場合は分かりづらいかもしれない。行政の立場で申し上げると、具体的な施策は様々あり、これから取捨選択や優先順位をつけていく必要がある。その作業を行う際の基準として、今日の資料のレベルで良いのかどうか。この中でいうと「みず」はある程度具体のイメージが付く気がするが、その他「まち」等はまだ具体的な取組の取捨選択や優先順位付けの基準にはならない。一方、抽象度合いとしてはこのくらいが適正だとも思うが、皆さんの中で違和感があれば教えて欲しい。

【萩野委員】抽象的であるべき内容を具体的にしてしまうと、後で大変なことになってしまう場合もある。一方で骨子だけを見せると混乱するかも知れない。個人的見解として、来年度の議論は、行ったり来たりしても良いのではないかと思う。順々に積み重ねていくのではなく、具体的な取組の議論が進んだ来年の9月か10月の段階で、改めてビジョンに立ち戻っても良いと思う。立ち戻った上で修正を加えていく方法でも良い。

【若月委員】ビジョンがふわっとしているのは、その通りだと思う。道の駅は、イメージがわいてくる。街を丸ごと道の駅とし、道の駅に魅力があれば外から人が沢山来て、商店街が活性化し、街が生活できる場となる。そこには、1日滞在できる場として、水辺や加茂山があるというイメージが浮かぶ。そのような絵が見えないと、なかなかイメージがわきにくい。次のフェーズでそのような絵をつくっていくことが良いのではないか。また、「懐かしさとあたらしさが交じり紡いで心地よさをもすまち」とあるが、いったいどのような街をつくっていけば、これができるのだろうか。もう少し具体性を増していかなければならないと思っている。抽象度が高いほどビジョンに近いとあったが、抽象度が高ければ高いほど、ぶれるのではないかと思う。先ほど、行ったり来たりを繰り返してもしても良いという話があった。今日の時点で決めるのではないのであれば、今の抽象度を出発点に進めていっても良い。例えば長岡市はイノベーションシティで活性化していこうという話もある。そのようなワードに収斂できればと良いと思う。

【杵鞭委員】来年度の国への補助申請は、これはこれで進めるとの理解でよいか。

【事務局】そうだ。

【杵鞭委員】ビジョンが誰のために、何のために発信するものなのか分からない。また、ビジョンを難しくすると誰も読まないかもしれない。対外的な発信と加茂市民への発信は別だと思うが、その辺りも含めて議論するのがよいのではないか。まち、水、緑がメインで、それらをつなげるのは分かる。一方、財政が厳しいなかで、

様々な祭りやイベントに対する加茂市の負担を減らすという流れもある。こうしたことも課題であると思う。一般化・抽象度合いについては、よくまとまっているし、このくらいが落としどころだと思う。

【渋谷委員】人口が増えないならば、交流人口しかない。「加茂でなければ体験できない」、あるいは「加茂に来れば体験できる」といったことを念頭に入れてキャッチコピーを対外的に打ち出すことが重要であり、その面ではまだこの内容では不十分である。参加・協力してくれる企業やプレイヤーが加茂に来てみたいと思うような見せ方をしていく必要がある。

【市川委員】ワーキンググループにおいても打ち出し方については議論があった。このため、本日は初見の人にどのようにみえるかを聞いてみたかった。

【事務局】ワーキングを経て取りまとめている過程で、事務局としても悩んでいる部分が本日の議論に出ていると感じている。委員の皆様からいただいているご意見は、全体的を得ているものばかりで、おっしゃる通りと思いながら聞かせていただいている。一番大きな話として、「懐かしさとあたらしさが交じり紡いで心地よさをもすまじ」とあるが、ビジョンとして総体を捉える表現と、キャッチコピーとしてメッセージを伝える表現とは違うのではないかと考えている。来年度はビジョン＝キャッチコピーでは無いというところから議論を進めていきたいと思う。また、ビジョンの内容の解像度については、細かくするところと、粗くするところ、その中間のところなどをこれからどのように落とし込んでいくのが、今後の大きなテーマであり課題であると思う。言葉だけでは伝わらない部分は、可視化をしてグラフィックによって、補っていく方法もある。伝えるべき人に伝わらなければならないという観点からすると、ビジョンの伝え方を検討していく必要がある。若い方、高齢者の方、それぞれに対して伝え方が異なるため、しっかりと考えていく必要がある。また、話は変わるが、1月より青年会議所の理事長が交代となった。すでにワーキンググループにはご参加いただいているが、本日から新しく西村委員にご参加いただいている。

【西村委員】青年会議所では、理事長を含めすべての役職が1月1日から1年間の任期制となっているため、2024年から議論に参加させていただくことになった。ビジョンの見せ方については、私も気になったところである。エリアビジョンの「まち」「みず」「みどり」「つながり」は、13ページの「ビジョンに基づくエリアの将来イメージ」につながると思っている。そうであれば、エリアの将来イメージがビジュアルのどの部分につながっているのかについて、分かりやすくして

いく必要がある。また、具体的な取組についても、今後開催されるワーキンググループに参加させていただきながら、意見交換していきたい。

【永山氏】取組を採択する基準や優先順位などが、明確に決まっていれば、ビジョンがぼんやりしていても良いのではないだろうか。例えば、定住人口を増やのではなく、交流人口、関係人口を増やすことを優先するという判断があった場合、取組が絞られてくる。ここからが質問となるが、新潟市では、2つの実証実験が採択されているが、その理由があれば教えてほしい。また、予算的なことも含めて、優先順位や取組採択の基準はどのようになっているのか。

【萩野委員】新潟市では社会実験に関わらず、様々なプレイヤーによる試みがなされている。また、ビジョンの中では将来像を示す様々なパースが描かれており、ある程度のことが網羅されている。このため、将来ビジョンを実現するための取組については、幅広く拾い上げることができている。新潟市主体の事業に関しては、新潟市の予算を使うことになるが、ワーキング主体の事業については、それぞれの担い手が資金を負担することになる。このため、新潟市やエリアプラットフォームからは、必ずしも強く要請することができない。ビジョンに沿っている取組であれば、お手伝いは可能だが、お手伝いができない取組もある。現在、ワーキングで仕立てようとしている社会実験があるが、プレイヤーの間で温度感の違いもあるため、この部分を鑑みながら進めている。また、東大通りのプロジェクトに関しては、地元も方々も意気込んでいるところもあるため、優先順位が高い取組となっている。官民連携の取組は、ある程度の合意形成に基づき、それぞれの役割のなかで動いていくため、早く動いているものもあれば、そうでないものもある。質問にあった取組を採択するための明確な基準はない。早く動き出している取組が2つあるという状況である。

【永山氏】プラットフォームが、プレイヤーをどのようにサポートしていくのが重要であると思う。すべての事業はサポートできないため、優先順位や取捨選択は必要だと考えた。

【萩野委員】エリアプラットフォームとしては、具体的な将来像のイメージをつかんでおく必要がある。それをどこまで外に出すか、出さないかについては、議論や判断があると思うが、具体的なイメージがないとプレイヤーをコントロールすることもできなくなる。そういう意味での基準は、来年度に議論する必要がある。

【小林委員】新潟市の場合、プレイヤーはエリアプラットフォームのメンバーなのか。

【萩野委員】プレイヤー全員がプラットフォームのメンバーではない。会員数を増やしたいため、できるだけメンバーになっていただくようお願いしてはいるが、ワーキングは、エリアプラットフォームの会員ではなくても参加できるようにしている。地域アプリをつくるワーキングでは会員以外の企業も参加している。

【事務局】エリアプラットフォームについては、第5回ワーキング及び第4回準備協議会のなかで、議論をさせていただければと思っている。また、未来ビジョンがあるのと無いのとでは、どのように変わるのかということも、今後きちんとお伝えしていきたい。それによりプレイヤーが参加しやすい環境になる。新しい取組を考えることも重要だが、これまで続けてきた雪椿まつりや夏祭りをどのようにつなげていけるのかということも非常に大事だと思っている。この辺りも皆様と議論していきたい。

【市川委員】未来ビジョンのあるなしの違いもそうだが、エリアプラットフォームのメンバーになる、あるいはプレイヤーとしてそこに参画していくメリットについても示していくことが重要である。

【加藤委員】明確な旗を掲げる必要があると考えている。商店街のワーキンググループでは、細かい議論から始まってしまっていたが、「そうではなく旗でしょう」ということで、商店街の「道の駅化」を旗として掲げてみた中で議論がまとまっていくようになった。また、これまで出てこなかった議論もできるようになった。一方、他市の事例を見ると、企業がプレイヤーを担っているケースが多い気がする。しかし、加茂市の場合は、そうは簡単にいかないのではないかと。一般の主婦、サラリーマン、学生など、普通の人たちが、いかに張り切って参加してくれるかというところが、大きな肝になると思う。加茂市において重要なのは、それら普通の人たちが張り切って参加してくれるよう分かりやすく伝えることだと思う。

以 上

第3回加茂市エリアプラットフォーム準備協議会 議事要旨（概要）

発言者	発言内容	事務局回答
萩野委員	エリアビジョンの実現に向けた取組について、今後、ポイントとなる事業を見極めることが重要。	令和6年度は、具体的な取組について検討。
松井委員	ビジョンとして確定する前の案を市民や企業にどのように見せていくのか。	本日の議論を踏まえて「未来ビジョンの骨子」を作成し、次回の協議会を経て市民に公開予定。
田辺委員	継続的に加茂市に来てくれる人を増やすことが大切で、こうしたことを具体的に考えることが重要。	<ul style="list-style-type: none"> ・ビジョンとして総体を捉える表現と、キャッチコピーとしてメッセージを伝える表現は異なるものであることを基本に、来年度から議論を進めたい。 ・ビジョンの内容の解像度は、細かくするところと、粗くするところ、その中間のところなどを今後議論。 ・言葉だけでは伝わらない部分は、グラフィックで補う。 ・若い方、高齢者の方、それぞれに対して伝え方が異なることを認識して検討。
市川委員	加茂も「何かやるよね」というメッセージを打ち出すことが必要。	
萩野委員	誰がいつやるのか、長期か短期かといった仕組みについて、来年度は深めることが必要。	
小林委員	ターゲットとなるプレイヤーに向けた宣伝文句が必要。	
中丸委員	市内外の人に対して、何かしらのメッセージ性が必要。	
萩野委員	ビジョンの実現に向けた主要なプロジェクトを発信すると、イメージしやすくなる。	
萩野委員	来年度の議論は、行ったり来たりしても良く、具体的な取組の議論が進んだ段階でビジョンを見直しても良い。	
若月委員	今の抽象度を出発点に行ったり来たりを繰り返しながら、具体的なイメージに収斂できると良い。	
杵鞭委員	対外的な発信と加茂市民への発信は、それぞれ分けて議論が必要。	
渋谷委員	参加・協力してくれる企業やプレイヤーが加茂に来てみたいと思う見せ方が必要。	
西村委員	エリアの将来イメージとビジュアル（イメージ図）のつながりを、分かりやすく示すことが必要。	
加藤委員	主婦、サラリーマン、学生など、普通の人たちが、いかに張り切って参加してくれるかが重要。	
杵鞭委員	財政が厳しいなかで、様々な祭りやイベントに対する加茂市の負担を減らすという流れもある。	新しい取組だけでなく、これまで続けてきた雪椿まつりや夏祭りの継続も重要であり、皆様と議論していきたい。